

## スーラト—アユタヤ—長崎

— ジョージ・ホワイトのシャム貿易報告書（1679年）の紹介を中心として —

長 島 弘

### はじめに

私は先に発表した拙稿において、17世紀後半にモール人（ムスリム）商人がたびたび長崎に来航していたことを紹介し、それらモール人商人を乗せた船がアユタヤのモール人コミュニティの頭目とされるオプラ・シノラトなる人物によってしばしば艀装・派遣されたという記述をも紹介したが、オプラ・シノラトや長崎に来航したモール人商人たちの所属する民族系統については、当時のアユタヤ朝においてペルシア人が政治的経済的に非常に大きな勢力を持っていたことなど若干の検討を加えたものの、不詳とせざるをえなかった<sup>1)</sup>。

ところが、このたび長崎県立大学国際文化経済研究所の派遣により1993年11月17日～28日にかけてバンコク、アユタヤでの調査・史料収集を行なうことができた。その結果得られた史料や情報に基づくアユタヤ朝でのモール人の活動の全体像についての研究は後日を期さねばならないが、本稿では上記の問題点についての解明の手がかりとなる史料を翻訳・紹介し、若干のコメントを付けて調査報告の一端としたいと思う。

その史料とは、アユタヤ滞在のイギリス人商人ジョージ・ホワイトからバンタム（バンテン）にいるイギリス東インド会社の代理人（agent）に宛てて1679年に書かれた商業報告書である。この報告書については、Maurice Collis, *Siamese*

*White* においてもその要旨が紹介されている<sup>2)</sup>が、そこでのオプラ・シノラトやモール人の貿易活動の紹介はかなり概括的で正確さを欠いており、その意味でここで同報告書を翻訳・紹介することも無意味ではないと思われる。

同報告書は原文書が現在 The British Library, Oriental and India Office Collections に架蔵されているものと思われるが、私が今回訳出するのは、*Records of the Relations between Siam and Foreign Countries in the 17th Century — Copied from papers preserved at India Office —* 所収のものである<sup>3)</sup>。そこでは同書の編者によって I. O. C. No. 4696 と注記されている。編者によれば、この文書は痛みが激しく、欠落部分や読み取り不能の部分が多いとのことである。以下の翻訳ではそのような読み取り不能の箇所はそれと明記したり、……で示した。なおこの報告書はすでに別に J. Anderson, *English Intercourse with Siam in the Seventeenth Century*, 1vol., London, 1890 の Appendix E (pp. 421-428) に収載されており、以下の翻訳に際してはそれをも参照した。この報告書を書いた人物名は署名部分が読み取り不能であるが、上記の J. Anderson は、本文冒頭の「4年間の当地〔アユタヤ〕での滞在」という記述からして、ジョージ・ホワイト以外にはありえない、と断定しており、*Records of the Relations* の編者や

Collis も同様にみなしているの、それに従いたい。ただ Anderson によれば、ホワイト自身が「最近イギリス東インド会社に採用された」と書いている、ということであるが、Collis は、ホワイトは当時私商人であったとしている。またこの報告書の書かれた年を Anderson は1678年としているのに対して、*Records of the Relations* の編者は1679年としている。これらの点は近くシャム（アユタヤ朝）関係のイギリス東インド会社の全文書が上記の British Library, Oriental and India Office Collections の Anthony Farrington 氏およびタイ国チョラロンコン大学の Dhiravat na Pombejra 氏によって校訂・注付きで刊行されるとのことであり、そこで確認できるであろう。

なお、以下の翻訳においては（ ）は地名、人名、商品名などの原綴りを示し、[ ] は編者による補足や注記を示し、[ ] は訳者による補足や注記を示す。またく > で示した小見出しは、編者の小見出しを参考にして訳者が付したものである。

### 1. [ジョージ・ホワイト George White] からバンタムの [イギリス東インド会社の] 代理人宛の報告書 日付シャム1679年 [?月?日]

私はここにあなたにシャム（Siam）王国の貿易全般についての報告を送ります——それが当地での会社の事柄に関するあなたの諮問に対していくらかでもお役に立つことができるかも知れないことを願って。それらは私の4年間の当地での滞在の間の調査と観察が私に教えてくれたところによる個々の事柄についての真実であります。

この王国の通貨はティカル（Ticall）と呼ばれる銀貨 [以下半頁分が破れて読み取り不能である]。

#### <国産の商品>

この国は国産のさまざまな有用かつ価値ある商品が豊富であり、さまざまな外国へのそれらの輸出は当地での大変大規模な貿易を支えています。その詳細は次の通り。アギラー樹〔沈香〕、アレカ・ナット〔びんろうじ〕、錫、サパン〔蘇木〕、象、硝石、鉛、象牙。これら全ては国王によって独占されており、彼の代理人たちによって販売に出され、他の者はすべて彼ら以外の者からそれらを買うことを厳禁されています。そしてその命令に違反したかどで住民のある者たちに厳罰が加えられたのを私は見たことがあります。しかし同じ違反を犯した外国人はその違反を好意的に見逃されてきました。

#### <アギラー樹>

アギラー・バンナーと呼ばれるこの国の最高品種のアギラー樹〔沈香〕は世界最高と評価されています<sup>4)</sup>。それはカンボジアとの国境近くの森に育つ高価な薫香料で、その貿易は数年間オークプラ・シノラト（Okphra Synnorat）という称号をもつ著名なペルシア人によって享受されてきました。彼は国王の特別な恩寵によって王室の独占への参入を許されたのですが、彼の最近の死去のいくらか以前にその特許権は取り上げられ、そしてそれ〔アギラー樹〕は今は国王の代理人たちによって国王のために取り引きされています。これはインドスタン〔ヒンドゥスターン〕、ハイデラバード、ベンガルでモール人たちによって大い

に用いられていますが、しかしそれ以上にトルコやアラビアで、そして特にメディナとメッカでモハメタン〔イスラム教徒〕の礼拝の際に大量に使用されます。オークプラはその品質に応じて異なった価格で売るのが常でした。最高級品は1ピクル〔118オランダ・ポント＝約58.76キログラム〕当たり16カティ〔1カティは120フルデン〕でした<sup>5)</sup>。それは、紅海のメッカで次の価格で売られていることを私が知っているものよりはるかに劣悪な品です。紅海のそれはフラセル〔ファールサラ (Fārsala。アラビア語)。1ピクル＝5フラセル<sup>6)</sup>〕当たり300ドル (\$) で、すなわちピクル当たり1500ドル近くで売られているのですが<sup>7)</sup>。〔以下半頁分破れて読み取り不能〕

#### 〈アレカ・ナット〉

アレカすなわちベテル・ナット〔びんろうじ〕はこのジュディア〔Judia。アユタヤ<sup>8)</sup>〕市と河口、すなわちバンコックの町の近く、との間の農園 (plantations) で育ちます。そこでは年25,000ピクルが集荷されます。その所有者は全てを国王にピクル当たり6マスで売ることが厳しく義務づけられています。それを今度は国王はピクル当たり1タエル〔テール。1タエル＝16マス〕でマカオのポルトガル人およびカントンの中国人に売ります。それら2港から毎年5～6隻の船とソマン (Sommanns)<sup>9)</sup> が主にこの商品を求めてやって来ます。そして同じ貿易を行なっているこの土地の住人である何人かの商人もいます。

#### 〈蘇木〉

蘇木は王国の様々な所で大量に生育します。それは国王によって国民から買われて、日本と中国

に輸出されます。国民は国王の倉庫にピクル当たり2マス5ファンで提供し、そして国王によって通常6マスで売られます。しかし77年〔1677年〕に彼は中国で価格が騰貴したとの知らせを聞いてそれを2ティカルに引き上げました<sup>10)</sup>。しかしその後価格は再び以前の6マスに下落しています。

#### 〈硝石〉

この国の硝石は私が今までに見たかぎりでは大変良質でよく精製されています。国王は国民にピクル当たり5ティカル与えますが、彼の手から〔売られるとき〕は17ティカルです。それが彼の標準価格で、その価格で毎年相当の量がアモイとコーチンチャイナ〔コーチナ〕の王たちの代理人によって、前者の王の場合はタルタル人との永続的な戦争において、後者の王の場合はトンキンとの戦争において使用するために、買われます。

#### 〈鉛〉

鉛はここには錫ほど大量にありませんし、イギリスでの我々のものと比べられる〔ものではありません〕。それは主に……に輸出され、その定価はピクル当たり10ティカルです。

#### 〈象牙〉

象牙は森林で……によって見い出され、彼らは毎年6～700ピクルを選び込み、それを国王が彼の代理人を介して次のレートで〔売ります〕。

2本で1ピクルのもの	16タエル
3本 "	14
4本 "	12
5本 "	10
6本 "	8

これは日本、中国、スーラト〔2行破損〕で大いに需要のある商品であります。

#### 〈その他の国産商品〉

全ての人が商うことができるもっと一般的な商品は、すなわち鉄、米、椰子砂糖 (Jaggarah)、木材、塩、ココナツ油、黒漆 (Ckeroon<sup>11)</sup>)、生皮などです。

#### 〈鉄〉

鉄鉱山は王国の最北部、すなわちスッコタイ〔スコタイ〕とプルセローク〔ピツヌロク〕の辺りにあり、国内の需要に十分なくらい生産し、そしていくらかは毎年マニラに輸出されます。その通常の価格はピクル当たり6ないし7ティカルです<sup>12)</sup>。

#### 〈米〉

この国は、米の豊富さで世界のどの地域にも勝るとも劣らない、周辺諸地域のための全般的な穀物倉です。隣接のマラヤ海岸は毎年遠くマラッカまでもそれが供給されます。そして76-77年〔1676-77年〕の時のように、もし米がジャワの辺でたまたま不足し高価な時は、オランダ人やその他の人たちが数隻分の貨物をそこへ運送します。それは当地ではパッラー (Parrah) と呼ばれる容積単位で売られます。80パッラーが1コヤン (Quoyan) となり、それはちょうど30ピクルの重量となります。そして並みの種類は通常コヤン当たり10ないし12ティカルです。しかし今年は2倍にも騰貴し、輸出は厳禁されています。なぜなら、人々の記憶に未曾有の現在の異常な氾濫が地上の作物に大打撃を与えたからです。

#### 〈椰子砂糖〉

椰子砂糖はプルセローク、カンペン (Campem = Kanpheng, スコタイの近郊)、スッコタイで大量に作られます。かなりの量が毎年日本へ、そしていくらかがマラッカへ〔輸出され〕、その通常の価格は2ティカル〔残りの部分は読めない〕

#### 〈皮革〉

水牛、牛、鹿、レイヨウの生皮は、内陸部の地方から大量にもたらされ、そして全てがオランダ人によって買い上げられます。彼らはその独占の特許権を持っています。

#### 〈この港での貿易に従事する外国船〉

この港での貿易にしばしばやって来る外国からの船はカントン、マカオ、アモイ、コーチシナ (Cochin China)、スーラト、コロマンデルからの船であります。

#### 〈カントンとマカオからの商品〉

カントンとマカオから輸入される商品は生糸と絹織物、水銀、白銅 (Tutenague、銅・亜鉛・ニッケルの合金)、磁器、銅製品、タンク (Tanckes) と呼ばれる鉄製の平なべであります。

#### 〈生糸と絹織物〉

生糸は一般にピクル当たり500ティカルで売られています——昨年もたらされた通常以上の量が価格を450ティカルまで下げるまでは、それは国王と中国人商人によって日本との貿易のために買われ、この国ではほとんど消費されていません。そして同地へは絹織物、すなわちパウンチ

## スーラトーアユタヤー長崎

〔Paunches、不詳〕、サテン〔しゅす〕、ダマスク織り〔紋どんす〕、リン(Lynns<sup>13)</sup>)もまた輸出されています。

### 〈白銅〉

若干の白銅もまた当地からその市場に行きます。しかしこの商品のより多量の販売がなされるのは、水銀と良質の磁器とともに、スーラトとコロマンデル、ベンガルにおいてであります。

### 〈銅製品とタンク〉

家庭での使用のための数種類のポットと皿などの銅製品は、同様の用途のためのタンク〔鉄なべ〕と同様に、当地で使用されるとともにマラヤ諸国に輸出されます。

### 〈カントンとマカオ向けの商品への投資〉

これらの船が求めるこの地で生産された商品の他に、彼らはまた他の諸地域から輸入された物産——チモールからのサンダル樹〔白檀〕、さらに胡椒、樟脳、鳥の巣など——をも買うということを私はすでにお知らせしました。それらはマレイ人によって小型のプロウ船(Prows)<sup>14)</sup>で当地にもたらされます。さらにスーラトおよび……の何種類かのキャラコは同様にカントンの中国人によって買われます。しかしマカオのポルトガル人がいつもその……の一部をお金……返したがるのを私は……〔知って〕います——彼らはそれを獲得するためにその商品を……安く売ることを余儀なくされているのですが。

### 〈アモイからの船〉

毎年アモイ……から国王のもとへ2ないし3隻

のソマー船(Somahs)が来ます。それらは主に硝石を求めて来ます。〔以下、2行読み取り不能〕

### 〈コーチシナからの船〉

コーチシナから同国の国王の船が硝石と鉛を求めて来ます。それらは主に金をいくらかのコランパー樹〔Columbah。カランバク=伽羅=沈香〕とともに持ってきます。後者はアギラーよりもっと高価な香木で、日本で大いに使用され、そこではその3、4倍の重量の銀と交換で売れます。

### 〈スーラトとコロマンデルからの船、テナッセリム〉

スーラトとコロマンデルからの船はこの国での使用と日本、中国、マニラへの輸出に適した何種類かのキャラコの荷を〔アユタヤ港に〕運んで来て、そしてそれらを錫、銅、白銅、磁器と交換します。しかし直接この港に来るこれらの船でもたらされるよりもっと多くのキャラコがこの国の王の船や何隻かのモール人の船でベンガルとメチュレパタム〔Metchlepatam=Machilipatnam〕からテナッセリムにもたらされ、そしてそこから陸路当地へ運ばれます。そしてこの相当の規模の貿易は現在完全にペルシア人とモール人によって〔by the Persians and Moors〕独占されています。彼らは現在事実上この国のあの地域および貿易の支配者で、彼らはそれを前述のウブラ・シノラト(Uphra Synnoratt)の親切さのおかげであると認めざるを得ません。彼は彼がこの国王の内閣(Cabinet Council)のメンバーであった30年の間引き続いて、彼自身の損害となる程度にまで、彼の同国人とモハマデン教徒の利益を伸張することに最大の努力をして来ました。そして彼はそのことに大いに成功し、その結果彼らがそれら

の地域に作った諸居留地は土着の人たちの数にほとんど匹敵し、しかも富と権力においてはるかに彼らを凌駕しています<sup>15)</sup>。テナッセリムとその…のメルギ町〔テナッセリムの外港〕のラージャたち (Rajahs) すなわち長官たち (Governors) はペルシア人であり、〔そこから〕当地までの道路沿いの全ての著名な町々——ピブリー [Pibley = Phetchaburi]、プラウン [Prawn = Pran]、ケダ、等々——においても同様であり、またテナッセリムからメチュレパタムとベンガルに航海する国王の船の指揮官たちもまた同様であります<sup>16)</sup> [以下半頁が磨損して読み取り不能]。

#### 〈東方への船〉

……毎年1、2隻のソマー船を日本とカントン、そして時々アモイへ派遣します。しかし国王のみが毎年1隻をマニラに派遣します。これらの事業は、海運と商活動とも、当地でも海外でも中国人によって運営されます。代理人 (Factors)、倉庫管理人、会計は皆その国の人であります。彼らの頭目で国王の臣下である人はウプラ・シヴェポット [Uphrah Sivepott = Ok Phra Sriphiphet] という称号を持つ大変高位の人物です〔不詳〕。

この港のその他の船はほとんど中国人によって所有されています——他の商人に所属する2、3隻を除いては。

#### 〈日本への船〉

日本向けのソマー船は6月に航海に出て1月に帰ります。それらが積載して行くこの土地の物産は、すでにお知らせしたように、蘇木、椰子砂糖、黒漆 (Cheroon)、象牙、そしてオランダの会社の特許権にもかかわらず中国人も買ういくらかの

皮革であります。それらの他に、それらの船はスーラトとコロマンデルの大量のキャラコを運びます。そして当地で売られた我がヨーロッパ製品のほとんど全てが同地へ輸出されます。彼らが同地から運んでくる見返り品は金の小判、銅、磁器です。

#### 〈金の小判〉

当地での金の小判の価格は1枚当たり13~14ティカルです。

#### 〈銅〉

彼らの銅は、彼らの婦りの品を買うために緊急の販売が必要な場合は、最初に到着したときには1ピクル当たり現金では6タエル1ティカルで買われるかもしれませんが、しかし同じ時に物々交換〔バーター取引〕では8タエルが相場です。それがスーラトやコロマンデルその他へ輸出される季節には、毎年それは常に現金でもその価格〔8タエル〕まで上昇します。国王は以前この商品の大部分を独占し、それを物々交換でピクル当たり12タエルで販売していたものでした。しかし、ウプラー・シノラトが国王を説得して、2年前からそれらを〔国王から〕買う価格を下げさせ、そしてその見返りに、輸入される〔銅の〕全てに10%の関税を課するようにさせました<sup>17)</sup>。

#### 〈日本の磁器〉

日本では今や大量の磁器が造られます。いくらかの製品は最近中国で造られたいかなる製品にも匹敵するのを私は見えています。〔しかし〕一般にはそれはかならずしもそれほど良くなく、そして昨年の異常に大量の……がそれを大変安価にしました。

〈マニラへの船〉

毎年マニラへ航海する国王の一隻のソマー船はスーラトとコロマンデルの……〔?キャラコ〕といくらかの中国産の生糸と絹織物、……鉄を積載して行き、ハリアル貨を帰り荷とします。〔以下2行読み取り不能〕

〈アユタヤでの船への課税〉

当地では最近銅に対して導入された10%の関税以外にはどんな輸入品にも輸出品にも関税は支払われません。しかし彼らは中国人から船の大きさにたいして税を課することを習って、その結果その税はイギリス人とオランダ人以外の全ての人々によって支払われています。

〈オランダ東インド会社の貿易〉

オランダの会社は約70年間当地で貿易してきました。彼らの居住地は川のそばにあり、そこに彼らは大変賞賛に値する広い住居を持っています。その商館にいるヨーロッパ人の数は約25人で、その半数以上は職人と水夫です。そしてこの商館長は彼に服属する別の商館をこの国王の領内の南方100リーグにあるリゴールと呼ばれる港に持っています。

この土地での取引は以前は彼ら〔オランダ人〕にとって大変有利でした。なぜならかなりの量のスーラトとコロマンデルのキャラコを大変な利益で容易に売り、それらの市場向けの帰り荷として当地で提供された錫の荷でそれに劣らない利益を上げていたからです。しかしこの両者の利益の流れは妨げられてきています。前者は次の理由で減少しています。すなわちテナッセリムでのモール

人の貿易が増大し、またスーラトからの船が直接に当地に航海し、それがこの国をあらゆる種類のキャラコで飽き飽きさせる程にし、〔その結果、キャラコの価格を〕バタヴィアからの命令が彼ら〔アユタヤのオランダ人〕に命じている最低販売価格よりはるかに引き下げたので、それゆえ今や彼らの年間の販売総額が諸費用を相殺できないということを私は確かな筋から知らされています。錫貿易は大変有利なものであったので、彼らは同商品の独占権を握ろうとし、この機会〔on this occasion〕にそれを一部実現したほどです。国王の以前の大寵臣の故ウプラー・シノラト——彼も大いに……のペルシア人でありましたが——が……する以前は……〔以下半頁読み取り不能〕

彼らの貿易の促進のためのかなりの特権、それらの中で最大のものはリゴールにおける錫の独占と同地でそれを人々から1バハール当たり15タエル2ティカルで買う自由であり、そのことが彼らがオチャ・ペチート〔Ocha Pecheet。オークヤ・ピチト Okya Phichit〕から被った損害にたいする多大な賠償となりました<sup>18)</sup>。しかしこれはまだ彼らのどん欲さを満足させることができませんでした。なぜなら彼らはさらに深く侵入して国王を説得して彼の錫を全て彼らの手の中に移させることによって自らをその〔錫の〕貿易全体の支配者にしようと数回努力してきました。私の到着以後一度彼らは国王に一つの提案をしました。それは彼ら自身がこの国が産する全量をバハール当たり16タエル（即金での支払いの場合）またはバハール当たり1カッティ（1年後の支払いの場合）で買い取る義務を負い、この契約は10年間効力を持つという提案でした。しかしそれは受け入れら

れず、そして彼の拒否は彼らにとって好運でした。というのは同商品はスーラトその他で価格があまりに大きく下落したので、それは〔もし契約が成立していたとしても〕彼らが自らのバーゲンを自慢するなんら十分な理由を持たなかったであろうほどでした。その取引において彼らは大変賢明なので、独占をたくらむのとは逆に、提供された数包みの受け取りを彼らが拒否した、ということを私は最近知ったところです。そして彼らが今日当地とリゴールで買う総量は800バハールを超えません。それをリゴールでは15タエルで買いましたが、当地では常に前述の購入価格の15タエル2ティカルでありました——現在の商館長がリゴールでの価格まで引き下げさせ、さらに当地とリゴールでさらにかなり安くすることについても話すようになるまでは。実際そのために努力することが彼には重要になっていると私は思います。なぜなら彼らがそれを現金で購入しなければならないということを考慮にいれなければならないことに加えて、当地でのバハール当たり15タエル〔の購入価格と〕とスーラトでのマウンド当たり9ルピー、あるいはマチュレバタムでのカンディー当たり29パゴダ（それらがそれらの地方での今日の市場価格であります）との差額では運送費をまかなえないからです。彼らは恒常的に生皮に大金を投資しています。それが以前の彼らの当地での大規模な貿易の唯一の有利な遺産であり、それは彼らに日本で大変結構な利益を生み出します。それらの同市場への輸送のために彼らは毎年バタヴィアから1隻の船を5月の初めに迎え、同船は翌月皮と蘇木を満載して航海に出ます。そしてこれ以外には、このバーゲン〔アユタヤ貿易〕のうちで彼らが今利用しているのはせいぜいバタヴィ

アとマラッカへココナツ油……を供給することにあります……〔この文書の残余の10行および署名は読み取り不能〕

## 2. 同報告書の内容についての若干のコメント

冒頭に述べたように、この報告書からはオブラ・シノラトについてかなりの情報が得られる。まず彼はペルシア人ムスリムであって、報告書が書かれる少し前に死去したが、それまで30年間アユタヤ朝の「内閣」のメンバーであり、そしてその間ペルシア人やモール人の利益の拡大に務めてきたという。特に彼の庇護の下に、アユタヤからテナッセリム、メルギに至る地域の都市や町の長官たちはペルシア人などのムスリムが任命されていたとのことである。また国王の特別な恩寵によって数年前から国王による沈香の独占販売への参入を許されていた。彼はまた2年前から国王による日本銅の販売にも関与していたようである。

なお、このたび私が参照し得た Dhiravat 氏の研究の中では、1661年の海南島沖での彼の投資した船のオランダ船による拿捕が彼についての言及の初出である。彼は1679年に死去したとされる。彼は1663年のアブドゥル・ラザークの失脚以来アユタヤ朝の宮廷におけるモール人勢力の代表であった。同研究ではオブラ・シノラトは『スレイマーンの船』に出てくるギーラン出身のアーカー・ムハンマド (Aqa Muhammad) と同一人物であろうとされる<sup>19)</sup>。オブラ・シノラトの他にこの時期に有力なペルシア人はいないので、おそらくこの比定は正しいであろう。

このイラン系のオブラ・シノラトは前稿で見た



ように1660年代前半にしばしば日本向けの船を襲撃していた。しかし1679年に書かれたこの報告書では彼自身が日本に船を派遣していたとは述べられていない。確かに彼は日本銅の貿易に関与していたように窺われるのであるが、それはむしろ国王が独占的に買い付けたものを国王から買い取ってインド方面に輸出する面に主に関与していたように思われる。なぜなら国王による日本銅の販売価格を引き下げること、インド方面へ輸出する商人にとって有利になるからであり、他方、銅を日本からもたらした商人は国王に輸入関税を支払わなければならないからである。

この点では、Dhiravat 氏は、オブラ・シノラトはアブドゥル・ラザークとは異なりオランダ東インド会社の確固とした友人であったと述べている。彼は当時のオークヤ・プラクラング（大蔵大臣兼外務大臣的地位にあった）のライバルであったが、後者がリゴールの錫貿易をめぐるオランダ東インド会社と対立関係にあったのに対して、彼はオランダ人と友好関係にあったとされる<sup>20)</sup>。もし彼が1660年代前半と同じように日本貿易に積極的に関与していたならば、同じく日本との貿易を重視しているオランダと少なからず対立することになったのではなかろうか。もし Dhiravat 氏の述べるように両者が強固な友好関係を保っていたのであれば、彼の70年代における日本貿易への関与は限定的なものであったことが窺えるであろう。ホワイトのこの報告書でも日本や広東、アモイ、マニラとの貿易も海運も中国人が担当していると述べられている。しかし、オブラ・シノラトを初めとするモール人の日本との貿易関係についてはさらに検討する必要がある。

次にこの報告書ではモール人がペルシア人と並

記されている箇所があったが、このモール人をどう解すべきであろうか。前述の Collis はインド人ムスリムと解している。しかし前稿で検討したようにオランダ側史料ではモール人を広くムスリムと等置している。本報告書でペルシア人とされているオブラ・シノラトも前稿で紹介したオランダ側史料ではモール人コミュニティの頭目とみなされている。ジョージ・ホワイトが「モール人」という語をいかなる意味で使用しているのかの検討が必要であるが、彼が上記の箇所で「ペルシア人やモール人」(the Persians and Moors)と述べたとき、ペルシア人とモール人をどれほど厳密に分けて考えていたかも問題であろう。むしろあまり厳密に区分していなかった可能性もあろう。

インドーアユタヤ朝ー日本の貿易関係について見てみると、この報告書では「スーラトとコロマンデルからの船はこの国での使用と日本、中国、マニラへの輸出に適した何種類かのキャラコの荷を〔アユタヤ港に〕運んで来て、そしてそれらを錫、銅、白銅、磁器と交換します。しかし直接この港に来るこれらの船でもたらされるよりもっと多くのキャラコがこの国の王の船や何隻かのモール人の船でベンガルとメチュレパタムからテナッセリムにもたらされ、そしてそこから陸路当地へ運ばれます。そしてこの相当の規模の貿易は現在完全にペルシア人とモール人によって独占されています」と述べられていた。インド方面へ輸出された商品の内日本からのものは銅と磁器であった（磁器はもちろん中国産のものが重要であったが）。アユタヤからインド・アラビア・ペルシア方面への輸出品としては沈香も重要であった。報告書によれば、「〔最近〕テナッセリムでのモール

人の貿易が増大し、またスーラトからの船が直接に当地〔アユタヤ市〕に航海し、それがこの国をあらゆる種類のキャラコで飽き飽きさせる程にし」ているので、オランダ東インド会社によるインド綿布のアユタヤ市での貿易が減少しつつあるということである。『スレイマーンの船』によれば、ペルシア国王からアユタヤに派遣された使節の一行が帰路アユタヤ港からスーラトの船で帰国した<sup>21)</sup>が、上記の引用のように、スーラトの船が直接アユタヤ港に来航するようになったのは（あるいは来航が顕著になったのは）、新しい発展であったことが窺えるのである。ムガル帝国のベンガルからのムスリムによる海運事業は17世紀末まで大変活発であったが、その後急速に衰退したと言われている<sup>22)</sup>。上記の報告書によれば、アユタヤ朝でも少なくとも1679年ごろまではオブラ・シノラトを初めとするムスリムの海運・貿易活動が衰退するどころか大変活発であったことが窺われるのである。

#### 付 記)

本稿は1993年度長崎県立大学国際文化経済研究所からの海外研修の成果の一部である。今回の調査に当たっては、上智大学の石井米雄氏より貴重な御助言をいただいた。また現地での調査・史料

収集に際しては、シーナカリンウイロート大学の Plubplung Kongchana 女史およびチュラロンコン大学の Dr. Dhiravat na Pombejra 氏より、滞在中の全日程にわたって、一方ならぬ御配慮と御協力を賜った。Dhiravat 氏からは特に氏がロンドン大学から学位を授与された博士論文をコピーしていただき、その参照・引用を許可していただいた。本稿でふれることはできなかったが、Plubplung 女史には特にバンコック、アユタヤ、ロブプリでの現在のムスリム・コミュニティの調査の立案にご協力いただき、また同行していただいた。またシーナカリンウイロート大学の地理学者 Kawee Worrakawin 氏および同大学学生 Chainaron Sripong 氏にも調査に同行していただくなど大変お世話になった。またここに訳出した報告書の閲読およびコピーに当たっては Siam Society Library のスタッフの方々のお世話になった。J. Anderson の本は千代田区図書館の内田嘉吉文庫の架蔵本を閲覧させていただいた。また本翻訳に当たっては、難解な箇所の一部について長崎県立大学の同僚の徳島達朗、ロビン・イヴの両氏のご助言を得た。これらの方々および調査にご協力いただいた全ての方々に深甚なる謝意を表します。なお誤解があるとすれば、それは全て筆者の責任である。

[注]

- 1) 「17世紀におけるムスリム商人の日本航航について」、*Journal of East-West Maritime Relations*, Vol. 1, 1989, pp. 1-29.
- 2) Maurice Collis, *Siamese White*, First Edition London, 1936 ; Second Edition, 1951; Third Edition, 1963 ; Reprinted Edition, Bangkok, 1986, pp. 40, 52-53.
- 3) *Records of the Relations between Siam and Foreign Countries in the 17th Century—Copied from papers preserved at India Office—*, Printed by order of the Council of the Vajirāñā National Library, 5 vols., Bangkok, 1919-1921, Vol. II, 1634-1680, pp.202-213.
- 4) バンナーはカンボディアとの国境に近い都市の名前である (フーンス、フリート、コイエット著、生田滋訳・注『オランダ東インド会社と東南アジア』岩波書店、1988年、169頁参照)。
- 5) 1 ピクル=118オランダ・ポント。1 オランダ・ポントは約498グラム。したがって1 ピクル=約58.76キログラム。(前掲書、204, 205-206頁参照)。
- 6) 1611年にモカで1 frasula = 25 lbs. 11 oz. [411 oz. = 11.66kg. したがって1 ピクル=5.04フラセル]。したがって15 frasulas が1 bahar に相当する。H. Yule and A. C. Burnell ed. and W. Crooke new ed., *Hobson-Jobson*, Originally published, 1903, Second Edition, Delhi, 1968, p. 359参照。
- 7) この箇所の原文は次の通り。“Okphra used to sell it at different prices according to its goodness, the best at 16 Cat. per picul, much inferior to what I have known sold at Meccah in the Red Sea for \$ 300 per Frassell which amounts to near \$ 1,500 per picul [half a page torn and defaced.] これを本文のように翻訳したのであるが、アギラー・バンナーは「世界最高」と評価されていると既に述べられているところからすると、それが紅海で売られているものより「はるかに劣悪な品」だとされるのは理解できない (もっとも後にはコーチナのランバクがアギラーより高価な香木だと述べられているが)。\$ 300や\$ 1,500の‘\$’の部分 Andersonの本では‘ $\text{₨}$ ’となっている。もし Rex dollers だと 1 rex dollar = Rs. 2.16なので、1,500 rex dollers = Rs. 3240となり、これは1920フルデンの1.7倍。OEDによれば、dollarは real of eight、あるいはそれにほぼ等しい種々の貨幣をも表すとあり、そうすると 1 real of eight = 約 2 rupees だから上記の rex dollar とほぼ同じになる。Dhiravat 氏の研究書によれば、当時英商館員 Sangar のナライ王に負う借金は 2万 rix dollars となっている (Dhiravat na Pombejra, *A Political History of Siam under the Prasatthong Dynasty 1629-1688*, A thesis submitted to the School of Oriental and African Studies, the University of London, for the degree of Doctor of Philosophy, January 1984, p.341)。以上からこの \$ は当時のドルの一種あるいはハリアル貨幣とみなしてよいと思われるが、その場合はメッカでの上質の沈香の価格がアユタヤでのほかに劣悪な沈香の価格の1.7倍にすぎない、いいかえれば、オブラ・シノラトの販売価格が異常に高いということになる。しかしもしこの「劣悪な」が「上等の」の誤りだとすると、全体の意味はかなり変わってくるだろう。あるいは “the best at 16 Cat. per picul” で一つの文章が終わって、次の文章が “Much inferior to what I have known sold at Meccah in the Red Sea for \$ 300 per Frassell……” と読むべきなのかもしれない。そうすれば、「私が [アユタヤで] 知っているものよりずっと劣悪なものがメッカでフラセル当たり300ドルで売られていた」と逆の意味になる。なお、万 $\text{₨}$ 1,500が1500ポンドだとすると、それは1920フルデンの7.8倍となるが、 $\text{₨}$ をポンドと読むことは不可能と思われる。
- 8) Judia はオランダ語ではユディアとなり、この方が原地名に近い。
- 9) 後の方では ‘Somah’ と綴られている。ある解説では、‘soma’ と表記され、それは月を意味し、したがって「月の形をした船」、「箱船」であり、中国船の一種とする (*Tresoor der Zee-en Landreizen*, Ed, by C, G, M, van Romburgh and C, E, Warnsinck-delprat, ‘s-Gravenhage, 1957, p. 674)。また別の解説では、somme すなわち日本船、とする (Gervaise, Nicholas, *The Natural and Political History of the Kingdom of Siam*, A. D. 1688, Tr. and ed by John Villiers, Bangkok, 1989, p. 253)。いずれにしろここでは中国系のジャンク船のことと思われる。
- 10) 1 カティ=20タエル。1 タエル=4 ティカル。1 ティカル=4 マス。1 マス=2 ファン。(フーンス他、前掲書、204頁)。したがって12ファン→16ファンへの値上げである。
- 11) 後の方では、‘Cheroon’ と綴られている。その方がよいであろう。ルペールはポルトガル人はこの

樹脂を 'Cheyram' と呼び、それは 'Cheyra' に由来する、と述べている (La Loubère, Simon de, *A New Historical Relations of the Kingdom of Siam*, Tr. by A. P. Gen, First Edition, London, 1693, Reprint Edition, Ed. by John Villiers, Bangkok, 1986, p. 12)。「Cheran」と綴るものもある (Gervaise, *op. cit.*, p. 244; フランス他、前掲書、203頁では「チラン」とある)。

- 12) 「ピクル当たり6ないし7ティカル」は *Records of the Relations* の原文では “6m. 7 Ticals per picul” となっているが、Anderson の書では “6 : in : 7 Teccalls p Pec' : ” となっており、ここでは後者に依拠し、'm' は 'in' の誤読と見た。そして 'in' を 'into' すなわち「…まで」と解釈した。次の米の項の「10ないし12ティカル」の箇所も同様である。
- 13) 'Lynn'には「亜麻布」という意味があるが、ここでは絹織物の一種と思われるが、不詳。
- 14) Prows (プロウ船)。語源① The Malayal. pār-u, 'a boat,' ②島嶼部の言語 (マレイ、ジャワ、群島のほとんどの言語に共通) prāū または prā-hū。この語はしばしば特に「マレイ・プロウ」と呼ばれる特殊な種類のガレイ船にたいして用いられる。しかし Crawford はそれを「どの船にも適用される一般的な用語、しかし一般的には小舟にたいして用いられる」と定義する。(以上は *Hobson-Jobson*, p. 733による)。
- 15) 原文は次の通り。“the Colonies they have planted in those parts do almost equal the number of the Natives but far exceed them in wealth and power.”
- 16) 原文は次の通り。“the Rajahs or Governors of Tenasserim and the [?] town of Mergui being Persians and the like at all the eminent towns on the road hither, as Pibley, Prawn, Queda, &c. as likewise also the Commanders of the King's ships that sail from Tenasserim to Metchlepatam and Bengal.” Collis は、長官たちはインド人のムスリムかペルシア人であったとこの文章から読み取っている。実際にもおそらくその通りであったと思われるが、ここでは拙訳のように解した方が良いのではないかと思う。
- 17) この箇所は難解であるが、原文は次の通り。“but 2 years since Uphrah Synnoratt prevailed with him [= the King] to lower his price for buying thereof, and in recompence to himself to impose a customs duty of 10 per

cent upon all that was imported.”

- 18) オークヤ・ピチトから被った損害とは次のことを指す (以下 Dhirawat 氏の研究に依拠してその概要を記す)。1660年代初頭にペルシアのギラーン出身のアブドゥル・ラッザーク (アユタヤ朝での称号オークヤ・ピチト) が中国人のシャバンダルと共謀して、国王の許可なく、オランダ東インド会社のアユタヤでの貿易活動を大いに妨害した。1661年にオランダ船が海南島沖でポルトガルの旗を掲げたシャム国王船 (オブラ・シノラトが艦装) を拿捕したことの報復として、アブドゥル・ラッザークが1662年初めオランダ人の貿易特権を剥奪した。また彼ら二人は鄭成功の部下を中心とする中国人にオランダ商館を包囲させ、また日本向けの国王のジャンク船に載せるべく、オランダの独占輸出品たるべき鹿皮を含む商品を集荷した。1662年に台湾を喪失したこともあり、シャム国王船の日本貿易の成功に恐れを抱いたオランダ側は、1663年にアブドゥル・ラッザークが外国船の来航の減少の責任をとらされて投獄されたにもかかわらず、1663年11月から翌年2月まで2隻の船で河口を封鎖し、1隻の国王船を拿捕した。その結果、1664年8月にオランダ側とシャム側との間で条約が成立した。その条約では、シャム国王が中国人の水先案内人や水夫を乗船させることが禁じられた。他にはオランダ人には治外法権が認められ、また国内いたるところで誰とも交易することが認められた。しかしリゴールにおけるオランダの錫購入の独占権がみとめられたのはこの条約においてではなくて、1670年、より厳密には1672年のことであった。しかしその後も錫の密輸は続き、オランダ側は当時のアユタヤ朝における官僚の最有力者であったオークヤ・ブラクラング (大蔵・外務大臣) 自身が代表的な密輸者であると名指ししている。Cf. Dhiravat na Pombejra, *op. cit.* pp. 292-294, 297-306, 313-315.
- 19) *Ibid.*, p. 301, 311, 326, 328. なお、Oudaya Bhanuwongse, *A Genealogical Narrative of Sheikh Ahmad Qomi Chao Phya Boworn Rajnayok The Persian*, n. d. に依拠して、今永清二氏が述べるところによれば、アユタヤに最初に渡来しイスラム共同体を創始したのは、ペルシアのコムタイナジャハール出身のシェイク・アフマド・コミ (Sheikh Ahmad Qomi, ?-1659. 後のタイ政界で活躍するブンナグ家一族の始祖) で、彼は後に大蔵・内務大臣に就任し、イスラム共同体の長としての地位もアユタヤ王朝によって公認された。そして彼とともに1602年にアユタヤに渡来し

## スーラトーアユタヤー長崎

た彼の弟のモハムド・サイド(Mohamudh Said)とアユタヤ貴族女性との間に生まれたのがアガ・モハムド(Agha Mohamudh)で、彼はナライ王に仕えて プヤ・スリ・ナオワラトル(Phya Sri Naowaratr)の称号を受けた。シェイク・アフマドの死後、アガ・モハムドの子の一人であるクァオウがナライ王により第2代のイスラム共同体の長として公認されたという。以上がどれほど史実を反映しているかは、さらに検討を要するが、このアガ・モハムドがアーカー・ムハンマドであり、称号オブラ・シノラトがプヤ・スリ・ナオワラトルと同一のものである可能性はかなり高いように思われる。ただし、アーカー・ムハンマドがギーラーン出身とされるのに対して、アガ・モハムドはコム出身とされており、この点は相違

している。今永清二、「トンブリのイスラム社会形成に関する一考察」『史学論叢』第22号、別府大学史学研究会、1992年、22-29頁参照。なお、ここに参照した Oudaya 氏および今永氏の論文は Plubplung 女史の御教示・御提供による。

- 20) Dhiravat, *op. cit.*, p. 326.
- 21) Muḥammad Rabi Ibn Muḥammad Ibrāhīm, *Safīna-i Sulaimāni*, ed. by Dr. 'Abbās Fārūqi, Teheran, イラン王暦2536年(?)、p.216 ; *The Ship of Sulaiman*, tr. by John O'Kane, London, 1972, pp. 217-218.
- 22) Om Prakash, *The Dutch East India Company and the Economy of Bengal 1630-1720*, Princeton, 1985, pp.221-234.